



現代人形研通信

創刊号

2024年1月5日発行

謹賀新年

新しい年とともに、現代人形文化研究会の通信創刊号をお届けします。
令和6年能登半島地震の被害にあわれた方に心からお見舞い申し上げます。

目次

- ・現代人形研 役員の抱負
- ・現代人形研 これからの予定
- ・活動報告
- ・レポート
- ・インフォメーション
- ・特集 特別インタビュー よねやまりゅう
- ・徒然コラム（羽関チエコ）



特別インタビュー よねや まりゅう

75才にしてできたこと、
できていないこと
北鎌倉古民家ミュージアム
で回顧展を開催中のよねや
まりゅう氏が現在の心境を
語ります。



徒然コラム 羽関チエコ

思わず息を飲んだ画像
—ルハンシクからの便り
ロシアに侵攻されたレハン
スクで音信不通だったウク
ライナ人作家レムール・ロ
リと1年以上たって連絡が再
開しました。

現代人形研 役員の抱負



羽関チエコ（理事長）

私が創作人形の仕事を始めてから 30 年ほどになります。その間、この面白い媒体を体系的にとらえる専門団体や研究者の方がいると良いと思っていました。結果、自分たちでやることになりました。現代人形文化研究会は公益を目的とする特定非営利活動法人です。私たちの活動が引き継がれていくことを目標に励みたいと思います。会員の皆様の応援をよろしくお願いいたします。



西村 FELIZ（副理事長）

自分が関わったことのある人形作家やその作品が、報われない形のまま記憶や記録から消えていく様を見続けてきました。全ては無に帰し、消滅するのもまた文化の正しい在り方かとも思いますが、それに抗った先の未来を見てみたいと思いました。皆様のお知恵とお時間を拝借させていただければ幸いです。どうぞよろしくお願いいたします。



井桁裕子（理事）

人の歴史とともにずっと作られてきた星の数ほどの人形と、その作り手たち。創作人形についての記録は「今この場所から見える星だけでも書き留めておこう」というような果てしない仕事に思えます。そして人形の作り手達は忙しく、限られた人とししか良き交流が生まれません。この研究会が、星々が共に語るプラネタリウムになったら素敵だなと思い、私もささやかながら力添えをしたい所存です。



榊山裕子（理事）

「人間にとって人形とは何か？」これは先日出演した TV 番組「ガリレオ X」のテーマである。わたしは「人形は 20 世紀において他者としての象徴的な役割を果たした」と述べたが、そこには 21 世紀において人形は 20 世紀と同じ役割を果たすわけではないという含意があった。では人形は今後どのように人と関わっていくのだろうか。過去と現在を検証することで人形の未来も見えてこよう。この研究会がそのための一つの拠点となればと思う。

現代人形研 役員の抱負



青の羊（理事）

人形という存在は物心ついた頃には身近にありました。それを自ら作るという「遊び」としながらその行為に愛情をそそいでいたのを懐かしく思いだします。

その頃は特に深く掘り下げて考える事もなく社会に出てようやく何故、惹かれるのか？人形とは？と少し意識する事は増えました。そんな人形について問うていこうとする現代人形文化研究会が発足し、皆さんと同じく楽しみにしている一人です。



村井 芳典（理事）

創作人形の方々が多いなかで、うちは独特な立場かもしれません。元々量産の玩具や人形が好きで人形を作り始めたのも、自分好みにデザインした量産人形が欲しい。更に加工していろんなカスタマイズしたいというのが理由です。個人という立場で原型を作り、メーカーと組んで金型をおこし工業製品として量産するという活動そのものを作品として活動してきました。これまでの経験を生かしてお力になれる事があればと思っています。またこれからも量産も含めた表現を続けていきたいと思っています。



本多厚二（理事）

自分自身の創作活動は“軽彫刻”ととらえています。現況の創作人形にまつわる枠にとらわれず、ヒトがつくることの根源的な作用や効果、実験としての創作に立ち返り、より自由なパーソナリティの表現手法としての創作活動が、広く浸透していけばいいなと思います。人間にとって必要なものと広義の“遊び”の中のものづくりとコミュニケーションと創作人形の関係性を考えたいです。



古屋紀美子（監事）

生まれたばかりの会を多くの皆様に知っていただくため、理事の皆様と会員の皆様のお手伝いできればと思っています。

現代人形研

Contemporary Ningyo Culture Society

設立記念展

1月19日(金)～21日(日)

会員作品募集中

出品者(順不同)
風らい坊
柴崎弘子
赤堀周恵
ちしたかずよ
古城真理
長谷川裕子
田中裕子
くるはらきみ
高村とき枝
長岡哲生
矢部藤子
役員作品



会場からのライブ配信 1月20日(土) 1pm、5pm (各約1時間)
配信アドレス (zoom) はインスタグラムでお知らせします。

・設立記念展

1月19日(金)～21日(日) 東村山市立中央公民館1F展示室
東京都東村山市本町2丁目33番地2 西武新宿/国分寺線「東村山駅」
東口徒歩2分 イトーヨーカドーの並び

1月19日(金)12:00～18:00

1月20日(土)10:00～18:00

1月21日(日)10:00～16:00

懇親会 1/19 18:00～会場未定 ※参加希望の方は1/15まで

member.gendainingyo@gmail.comにご連絡ください。

ZOOM ライブ配信 1/19 午後1時、午後5時の2回 URLはインスタグラムでお知らせします。

インスタグラム <https://www.instagram.com/gendai.ningyou/>

・ボランティア募集

展示手伝いやアーカイブのスキャン作業にご協力いただける方を随時募集いたします。

1月は「設立記念展」の展示当番、搬入搬出のお手伝いを募集しております。ご協力いただける方は1/10まで

member.gendainingyo@gmail.comにご連絡ください。

・第2号の発行

初年度は期間が短いため、通信は不定期で発行いたします。(通常は隔月を予定) 次号は早ければ2月中に発行予定です。

活動報告

・2023年11月26日 ドールアニマルウィンターフェスティバルに参加
当会として、初めての活動。主催者よりご招待いただき、会の宣伝活動
をさせていただきました。

・ただいま公式サイト準備中。お知らせ用のブログもあわせて準備
しております。

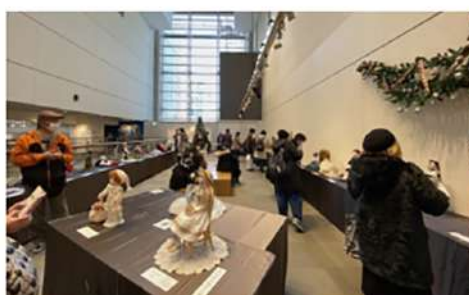
My・クリエイティブドール展

2023年12月20日(水)～12月24日(日)

横浜みなとみらいギャラリー

主催 ミワドール

第4回を迎えるMy・クリエイティブドール展。人形作家の三輪輝子さんのミワドールが主催。三輪輝子さん、大竹京さん、高橋操さんら13人の招待作家の作品と推薦作家、公募作品を展示。クリスマスシーズンで賑わうクイーンズモールにある会場では2000人の人が訪れたそうです。コンテストのグランプリは柴崎弘子さんが受賞しました。



公募展作品展示会場



招待作品展示室

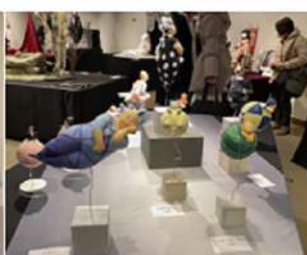


グランプリ受賞 柴崎弘子さん
「遥かな旅」

'思い切って自由に制作した作品で賞をいただけたのは嬉しいです。'



主催者 三輪輝子さんの作品



招待作家 高橋操さんの作品



推薦作家奨励賞 Enさんの展示

インフォメーション

◆◆展覧会◆◆

◎よねやまりゅう「異界への扉」展 ※特集記事参照

1月21日(日)まで開催中 開館時間 10:00～16:00 会期中休館日 1月1日、2日

入館料 大人500円、中高生300円、小学生200円

会場 北鎌倉古民家ミュージアム (JR北鎌倉駅 徒歩2分)

詳細 <https://www.kominka-museum.com/exhibition/>

◎横浜人形の家

ALICE × DOLL ー不思議の国のアリスと人形ー

3階企画展示室 1月28日(日)まで開催中 開館時間 9:30～17:00 (入館は16:30まで)

休館日 毎週月曜日、年末年始 *月曜日が祝日の場合は開館し翌火曜日に振替休館

同展観覧料 大人1000円/小中学生500円

参加作家

秋山まほこ / 井桁裕子 / ウエノミホコ / 片岡メリヤス / 北岸由美 / くるはらきみ / KLOKA / 恋月姫 / 清水真理 / 中澤忠幸 / 林由未 / 陽月 / 前田ビバリー / 増田セバスチャン / MOYAN / 山吉由利子

詳細 <https://www.doll-museum.jp/>

◎ストライプハウスギャラリー (東京・六本木)

2月4日(日)～15日(木) 浜 肇子 銀の針 細工物人形教室 東海道五十三次展 @ 3F ギャラリー

3月1日(金)～10日(日) 菊地 拓史 (立体) @ M、Bフロア

3月2日(土)～10日(日) 斉藤 修 (写真・人形) @ 3F ギャラリー

詳細 <https://striped-house.com/>

◎クラフトアート創作人形展 (東京・大阪)

2月4日(日)～10日(土) 東京交通会館ゴールドサロン

3月6日(水)～11日(月) 阪急うめだ本店アートステージ

詳細 <https://salon.craft-art-doll.com/>

◎ドルスバラード

第7回人形と絵の「春」展

3月13日(水)～19日(火)

丸善丸の内本店ギャラリー

詳細 ドルスバラード <http://www.dolsballad.co.jp/>

◆◆イベント◆◆

◎土井典さんの評伝出版クラウドファンディング 2月にスタート予定

澁澤龍彦の依頼でハンス・ベルメールのレプリカを制作してから、人形を制作するようになった土井典。寺山修司、種村季弘、土方巽ら時代に深く影響を与えた文化人と交流し、球体関節人形や肥満体の人形を制作しました。その土井典評伝に取り組んでいます。詳細は本通信次号にてお知らせいたします。

問い合わせ DFJ プレス dfj-press@nonc.jp

特別インタビュー

よねやまりゅう

俺が自分ですごいと思うのは、
止めなかったことだね。
今の年になって、若いときより集中力がある。
体力がどこまでついていくか。気力はある。



75才にしてできたこと、できていないこと

北鎌倉駅からほど近い大きな古民家を改装したミュージアム。時間の重みを感じさせる空間によねやまりゅう氏の40年あまりにわたる作品が一堂に会した。そのなかには天野可淡の生前に彼女の作品と並んで展示された蠟人形や、東京都現代美術館で開催された「球体関節人形展」（註1）の出品作品もある。大ベテランであり知人友人には著名作家の名が連なるが、70歳を過ぎても、新人と並んで公募展に応募し、新たな発表の場を自ら切り開く。そんなチャレンジャーのよねやま氏に話を伺った。



—こちらは素晴らしい会場で、作品が映えますね。懐かしい作品もありますね。

この個展のきっかけは丸善(丸の内本店ギャラリー)でやっていた「丸猫展」(註2)です。5年くらい前に、それに(作品を)出そうと思って、話を聞くために朝の満員電車に乗っていったよ(笑)。そこでまず瀬戸の「にっぽん招き猫100人展」(註3)に応募するように言われた。ラフ画の審査に通って100人展巡回展がこの北鎌倉古民家ミュージアムで行われ、俺の作品が大賞をとった。大賞をとったことで、瀬戸の工芸ギャラリー(瀬戸市新世紀工芸館)で個展をした。本来ならその後、この古民家ミュージアムで猫の個展をやるはずだったが、丸善で個展「異形の猫たち」展(註4)を行うことになった。でも俺は、個展はこの空間でやりたかった。希望を伝えたら、ここで個展ができることになったが、企画側の希望は、作品は全部猫で、というものだった。でもこの広さでやるなら、自分は旧作も全部出さないと無理だった。結局、1階は猫にして、2階は古いアート作品を並べることにした。

それまでも知り合いにはよく「個展をやらないのか」と言われていた。どこか銀座の狭いところを30万円くらいで借りて10点くらい展示して、それが締めくくりかな、と言っていたのだけれど、75歳になって、ここでこんなふうに(大掛かりに)できるのは嘘みたいな話だ。作品は、横浜にあった会社「オッドアイ」(註5)から今の山梨の大月のアトリエまで運んで、エアバッグに包んでゴミみたいになって置いてあったもの。俺が死ぬ前に処分しなきゃならないかな、と思っていたのが、全部いっぺんにこうして日の目を見ることになった。まだ運があるということかな。

----回顧展をここで実現されたわけですね。

偶然ね。今度つくる図録は『metamorphosis』というタイトルで、作品には全部関連性があるように見える。でもそれぞれの企画に誘われて、そのときどきは必死だったけれど、基本的にその場その場で作ってきた部分があるから、一貫性が本当に俺のなかにあるのか、なんとも言えない部分がある。友人は「本当にやりたいものを出してないでしょ」と言うけれど、それは事実なんだよね。俺にはもっとドロドロしたもの、エロティックなもの、グロテスクな表現がまだ蓄積しているかなという、やりきってはいない感じはまだあるが、それは猫の作品以外のことになる。猫は仕事プラス遊び。だからこの展示はひとつの区切りみたいなものだ。

最初は人形だったかもしれないけれど、ヒトガタからは離れていって、変形したものに興味があった。ここに展示している作品のなかにも変形が強いものがあるけれど、そこから先にあるものを出していきたい。平面も交えてね。俺にエネルギーと生命力があれば、という話なのだけど・・・。



---今回は鉛筆画も展示していますね。

絵は描けばうまくなるが、いい絵を描けるかは別。それで今、どれだけ描けるか、猫で表現しようと描いてみたわけ。そんなに面白くないけれど、ちょっと乗ったかな、というのがあった。彫刻をやっていたけれど頭がすごくよくて、農大で造園を教えていた先輩が見に来てくれて、「絵が面白い」と言ってくれた。俺も気持ちが入った絵があった。別の友人は「これはよねさんの本当の作品じゃない、本当はこういうものを作りたいんじゃない。ここでピリオドを打って5年後ぐらいにまったく違うもので展覧会をやったほうがいいよ」と偉そうに言うんだよ。半分あたっていると思うけど、俺がそれをできるかどうかわからない。

絵は猫の展示会のために仕方なく描いたけれど、本当は解剖とか骨が好き。人体とか枯れたものとか、抽象や半具象になるかもしれないけれど、そういうものをデフォルメしたり、人間の内部を崩してエロスとタナトス、そういう部分まで行きたいというのはある。今回の展示でピリオドを打てたことで、それが色濃く出てきたかもしれない。でも俺のなかからそれを出せるかどうかはわからないね。

FRPオンリーというのは考えていなくて、布や和紙も使いだしている。蠟も使うかもしれない。紙にしても、紙だけですよいいものを作る人っていっぱいいるよね。紙は独特な風合いがあるから、猫に使ってみた。俺にアール・ブリュットの狂気はないと思うけど、細かい紙をしつこくライターで燃やしていたとき、人から見たら変な人じゃないとやらないのかな、と感じた。アール・ブリュットの作家が、生活も何も考えずにたとえばボタンだけつけているとか、下手すると俺もそこに入り込むのかなと思うことはある。でも俺の場合、いろいろなことをバランスよく、締切に間に合わせて作ったりしてしまう。あそこまで集中できてやれるというのは、ものづくりとしては羨ましいというのがある。俺も作家や現代アートとかいうよりとにかく物を作る行為、そのために考えるのが好きなのよ。先に論理とかコンセプトとかある人間ではない。美術をやっている友だちで、ろくに制作もしない奴なのに「芸術家はすごい、神だ」と言うのがいる。でも、なんで芸術家が神なんだよ、そんなに芸術家ってすごいのかよ、と俺は言いたい。

俺が終始こだわっているのは、異形、変形、この世にない形を生み出すこと。たとえば、こんなのがいるのかと驚くような昆虫を見たときに異常に興味をもつ。この世にないものをどういうふうに自分のなかで想像していくか、変形させていくか、それが俺のなかにある。造形だけを考えると、形を作るのは難しくない。だけど、そのイメージ、発想から「よくこういうものを考えたな」と言われると、俺も変なところがあるんだろうなと思うわけ。狂っているというか、俺のなかにそういうところがあるから続けていると思う。でも俺の場合、今まで家庭をもったり、会社の経営ではバランスをとっていた。造形は作家とは違って、経営者としてもやることもある。その間は物を作ることができずフラストレーションがたまっていくんだよね。

最近になってようやく自分の制作ができるようになったかなと思うが、もう歳でいくつまでできるかなと思う。まだ大丈夫と言われるけれど、もう75歳だし、明日死ぬかもしれないし。でも、天才的な狂気ではないのかもしれないけれど、それがあるかぎりは続けようと思う。それが何かと言われると困るけど。そこを整理整頓しないで来ているから、ものづくりであっても作家としては成功しないのかもしれない。でもその辺はあまり考えてないからね、基本的に。

とにかく今は「作れ」と言われているように感じるんだよ。動いて作っているのは自分なんだけど。具体的に何を作れ、というわけじゃないけれど「何かを作れ、何かを生み出せ」と。俺に物を作らせる、作りたと思わせるなにかがひどくて、家にいても落ち着かない。家にいなければならないときは猫の絵をずっと描いていた。マグロみたいにずっと泳いでいないと落ち着かないというか。そういうことは三十代からやらないと駄目なんだよね、基本的にはね。俺なんか気づくのが遅い。でもそれを持続してられる人ってなかなかいないからね。



———そうやって今もずっと作り続けているんですね。

でも若い頃って有名になりたい、作家として大成したいとかあるじゃない。そのなかで友達が少し作品でブレイクすると、ジェラシーをもったり羨望の目をもったりする。でもぶれずに自分のものを、自分を信じて作っていくしかない。創形美術学校に同時期に通っていた人で、早く死んだ藤山(貴司)さんという人がいる。論理的な制作をして創形(美術学校)の校長にもなった。その人の作品をみると、抽象画ですがよく論理的で、俺とは対極。その人が有名になって、憧れみたいなのはあったんだよね。それでも彼が公的美術館で個展ができたのは死んでから。皆が呼びかけて平塚市美術館で遺作展(註6)を1回やっただけだった。

俺が自分ですごいなと思うのは、止めなかったことだね。今の歳になってやっと時間ができた。飲みに行かないし遊びにもいかない。若いときより集中力がある。気力もある。でも体力がどこまでついていくかというバランスが問題。よく歳をとると作品がよくなる人、粗くなる人とかあるけれど、俺はそれがあまりない。ないということは、俺はまだ可能性とか出し切っていないからかもしれない。技術的なことは、造形を超えた範囲でもいろんな素材使って、今もいっぱい勉強している。

今、一番楽しくて充実しているけれど、体力は大きな問題だね。疲れないといったら嘘になるし。俺はあと5年は車の運転はできると思うが、10年はわからない。車が運転できなくなったら、大月で大きな立体を作れないから家で絵を描いたり、小さな立体しか作れなくなる。10年前を考えると、会社も整理してきて負担も少なくなって子供も成人した。世の中は甘くないけれど、俺はこれだけのことができただけ幸せ。75歳でこれだけ元気だということもそうだ。造形の仕事がなくなったのは金銭面では大きいけれど、社会的に追われる仕事になくなって、自分の作品に追われるのは贅沢な悩みだね。

——そもそも、こういう表現の道をたどることになったきっかけは？

俺は小さいときから、この世にない風景とか宇宙の、そういう絵を描きたいと思っていた。ガウディを見たのは小学生のときだった。それで自分で建てたい家を作る建築家になろうかと、建築を目指した。でも芸大の建築科を落っこちた。それで、俺は彫刻なんて全然やっていなかったのに、小野善次郎という人(註7)のところで造形のアルバイトをするようになってFRPを覚えた。それから蠟人形を作る芸大出の松崎二郎(註8)という人と出会って、一緒に会社を作って平和島の小さい印刷会社の下を借りて蠟人形を作っていたけれど、仕事がなく一年間六本木で水道工事の土方をやったりした。

ロックバンドの前で素っ裸で踊る「ゼロ次元」(註9)の舞台上、俺も日本刀を振り回して踊って職務質問にあったこともある。ちゃらんぽらんだった二十代の頃はいろいろあった。俺が離れてから二郎さんは商売畳んで北海道に行って、テキヤと盃をかわした。蠟人形でフリークショーとかやろうとしたらしい。浅草のロック座の演出もやったことがあるそうだ。野坂昭如とか親しくて、都知事選に出ようとか、自分をアピールしたいタイプだった。あまり作品は作ってなかった。そういう変な人なんだよ。三浦しをんという作家が北海道にいたときの二郎さんのことを小説に書いている。俺はまた小野さんのところに戻り、二郎さんから北海道に行く時に誘われたけど、友人の紹介でドルスバラードに就職することを決めた。

人形の仕事をしようと思って、一度、人形作家を集めて何か企画をやろうと思ったことがあった。でも俺はやっぱり物を作りたいから、二足のわらじを履かないほうがいいと思った。金を稼ぐには造形屋だったし、金があったら自分の作品と若いやつ作品だけ紹介するような画廊をやりたいと思ったこともあるけれど、でも儲からなかったから子供を育てるのが精一杯。そのあと、こうやって運がめぐってきた。不思議だなと思うよ、人生。

でも、仕掛けているのは自分。猫の企画展に出したりするのも、チャレンジだからだよ。俺は天狗にならない。俺の趣味はピンタレスト（註10）で世界中の作家を見て、プリントして、人形から絵描きから彫刻からものすごいファイルにしている。すごい人がいるな、俺は大したことがないと思うけれど、でも自分ができることを生きているあいだに表現しようかなと。それがこうやって鎌倉で展示できたりする。とにかく、ひと目にさらすのはいいよね。

（聞き手 羽関チエコ）

註1）2004年2月7日～3月21日に東京都現代美術館で、映画「イノセンス」公開記念として開催された。日本で一時代を画した球体関節人形の代表的な作家が一堂に会した記念碑的な展覧会。

註2）丸善・丸の内本店で開催されてきた猫づくしのイベント/フェア「丸猫展」のこと。

註3）招き猫の名産地・愛知県瀬戸市が毎年開催している公募による創作招き猫のコンテスト。よねやまは2019年に大賞を受賞。

註4）2023年の「丸猫展」の折に、よねやまは丸善・丸の内本店で個展「異形の猫たち」展を行っている。

註5）よねやまが1990年に設立した美術工芸工房・有限会社オッドアイ(odd eye)。

註6）「藤山貴司展-闇と光の交錯 その彷徨と回顧」2013年9月21日(土)~12月1日(日) 平塚市美術館にて開催。

註7）造形技術者。ゼン工芸の創設者。

註8）東京藝術大学卒の彫刻家、蠟人形師。弟・松崎覚とともに幼少期にスーパーリアリズムの第一人者・上田薫に美術を学び、後年、弟とともに蠟人形を制作。

註9）1960年代から1970年代初頭まで「人間の行為をゼロに導く」をコンセプトに「儀式」と称する過激なパフォーマンスを繰り広げた美術家集団。加藤好弘、岩田信市らが名古屋で結成。

註10）インターネット上にある画像や動画を収集し保存できるWebサービス。



横浜の自宅と山梨の大月の仕事を車で一週間おきに往復する。この展示のために近所に大きなコンテナを借り、作品は全部一人で梱包し運んできた。会場への搬入も僅かな人の助けで、ほとんどを自分で行った。「俺、仕事早いからね、セッティングでもなんでも。体はまだ動くからね」



フェデリコ・フェリーニの「世にも怪奇な物語」をモチーフにした蠟人形。初期の作品で天野可淡の生前の彼女の作品と並んで展示をした。奥の作品は「球体関節人形展 dolls of innocence」出品作品

思わず息を飲んだ画像 — ルハンシクからの便り 羽関チエコ



私が毎年春に主催している「FANTANIMA!」という展覧会は2022年のロシアのウクライナ侵攻の影響をしたたかに受けました。両国の参加作家が多かったからです。いろいろな意味で影響がありましたが、そのなかでもロシアに占領されたルハンシク在住のレムール・ロリさんとは音信が途絶えてしまい、1年以上も彼女の安否がわからずに誰もが心配を募らせていました。すると12月24日に彼女のインスタグラムの投稿を見つけました。誰もが彼女の無事を知り嬉しかったのですが、その画像に思わず息を飲みました。汚れた手に伸びた爪。人形の手だとわかって、彼女がいったいどういう時を過ごしていたのかと胸が苦しくなる思いでした。その手がつくるハートにクリスマスの奇跡を感じたのは私だけではなかったでしょう。清い美しさを感じ、ただただ深く心を打たれました。彼女のアカウントには次々に喜びのコメントが寄せられ、1000人近くが「いいね」をしました。ダメ元で彼女に近況とこの手の造形についてDMで尋ねると、ちゃんと回答が返ってきました。とにかく、インターネットがつながらなくて、何度も連絡を発信しようとしたけどできなかったとのこと。この手は山羊の作品の一部で、ペーパーマッシュで造形し、油彩と水彩で彩色したけど、とにかく材料が手に入らないので自分で顔料を挽いて油と混ぜて絵の具を作ったりするそうです。今までの制作経験からそういう知識を得ているので、制作を続けることができますとありました。アートが自分の人生だという彼女は、制作することで生きる力を得るのです。ルハンシクには何も送れないし、あちらからも送ることができません。大変もどかしい状況ですが、彼女にまた晴れて参加してもらえるように、日本にいる私は待ち続けるしかありません。実は2023年のFANTANIMA!はウクライナの作家たちから強い批判を受けました。22年の侵攻直後、FANTANIMA!は寄付金や作品紹介で全面的に支援をし喜ばれたりしたのですが、ロシアやベラルーシの

作家たちとは展示で並びたくないという激しく拒否をされたのです。私はロシアやベラルーシの作家について、この侵攻を支持しないという確認をとって招待をしています。彼らも国内で言論を封殺され海外からは批判を受け苦しい立場にいます。彼らを拒否することはプーチンのやっていることと同じことになります。作品の世界は政治による分断の影響を絶対に受けるべきではないと考えます。しかし不当な爆撃を受け続け極度の不安を強いられるウクライナの人にとってはその理念をととても許容できないことはわかります。しかし一緒に FANTANIMA! を育んできた作家からの非難は堪えるものがありました。ノーベル賞やオリンピック委員会がウクライナから非難を浴びるニュースを見ると、同様の問題を抱えていると暗い気持ちになります。

この記事に掲載するにあたり、私がウクライナの作家から批判を受けたことをレムール・ロリさんに伝えました。彼女こそ侵攻された地域で一番難儀している立場の作家です。彼女も他の作家のように、私が関わることに不快を覚えないだろうかと聞きました。すると彼女は私とまったく同じ考えでした。そして、FANTANIMA! を非難したウクライナ人作家のことを残念に思うと書いていました。

「創作に関わる人間はもっと寛容でなければなりません。私たちは作品を通して愛や受容という人間に備わった事実だけについて語るべきです。残念ながら多くの作家たちが見栄えの良い仮面ばかり気にするようになってしまったのは悲しいこと。自分が今できることは、このクレイジーな世界で自制心を保つ人間で連帯すること。悲しまないで。わたしたちは耐えなければ。」

彼女を励ますつもりが、私が励まされてしまいました。これも奇跡のように思いました。

この会の始まりに際し「人形は人類の歴史と同じ長さを歩いてきました」と書きました。しかし争いも人類の歴史とともに絶え間なく続いています。どちらも人間が作り出すもの。人形は人間の愛と受容の象徴。争いは人間の憎しみと欲の象徴。

人形の文化を見守ることは、祈りでもあると感じています。

レムール・ロリのInstagram https://www.instagram.com/lemur_.lori/

編集後記

初めてのメルマガ配信で、慣れないことばかりでした。掲載内容もたくさんになりました。この通信も、会の活動も、会員の皆様にも参加していただき、一緒に育てたいと思っています。

これからどうぞよろしくお願いいたします。(羽関)

会員の皆様へ

・投稿募集 展覧会レポート、論考などこの通信で発表したい原稿がありましたら、会員連絡用 Email アドレス宛までお知らせください。掲載について検討させていただきます。

・展覧会・イベント情報 会員が投稿できる一般公開用ブログを準備中です。しばらくお待ちください。

現代人形研通信 創刊号 2024 年 1 月 5 日発行

特定非営利活動法人 現代人形文化研究会

189-0003 東京都東村山市久米川町 3 丁目 27-57 TEL 042-395-7547 (ノックプラッツ内)

会員連絡用 Email member.gendainingyo@gmail.com

本ページの画像や記事の無断転載を禁じます。©2024 NPO GENDAININGYO BUNKAKEN KYUKAI

